



# from IUPS

## 国際生理学連合 IUPS の役割

IUPS 会長

金子章道

京都で開催される第36回の IUPS Congress もいよいよ1年後に迫ってきた。日本生理学雑誌の巻頭言 VISION では生理学会会員の皆さんに IUPS のことを知っていただくために、現在の IUPS 理事が交代で IUPS の現状、活動、思想について執筆することになった。まずトップバッターとして IUPS の歴史、我が国との関係、問題点などについて述べたい。

IUPS は1889年スイスのバーゼルで開かれた第1回生理学国際会議（我が国では万国生理学会と呼ばれていた）が発端である。以後、この国際会議は2度の世界大戦で中断されながらも続けられてきた。1953年モントリオールの第19回会議において、国際生理学連合を組織として設立することが合意され、IUPS が正式に発足した。日本もこの設立のメンバー国として参加した。初期には生化学や薬理学など広い分野を包含していたが、1949年に国際生化学連合が分かれ、また1965年には国際薬理学連合が分かれて独立した。1959年に国際学術連合、現在の国際科学会議(ICSU)のメンバーとなった。

IUPS はその会則 Constitution の中に述べられているように、活動目的は科学、教育、学術上のことに限り、a) 生理学の進歩を促し、b) 生理学分野における知識の普及を促進し、c) 生理学における研究を奨励し、d) 生理学の国際学術会議 (Congress) を推進し、e) 生理学の発展に有用と思われる他の会議を促進し、f) その他、生理学の発展への寄与を図る、ことを事業及び目標としている。

IUPS の運営は4年ごとに開かれる総会、通常2

年ごとに開かれる理事会（理事15名）、原則として毎年開かれる執行委員会（会長、副会長2、会計理事、庶務理事）によって行われている。理事、執行役員は任期は規約によって原則2期までと決められている。また、実際の活動を行うに当たって8つの Commission と2つの Committee がある。

IUPS は55の国会員 (Adhering Bodies)、6つの地域会員 (Regional Members)、11の準会員 (Associate Members)、2つの連携会員 (Affiliated Members)、15の特別会員 (Special Members) によって構成されている。国会員 (Adhering Bodies) とは一つの国ないし地域において生理学者を代表する機関（科学アカデミー、リサーチカウンシル、ロイヤルソサイエティ等）を国会員と規定している。日本では学術会議がこれに当たる。国会員はそれが属するカテゴリーによって定まる人数 (BY-LAWS に規定) の代表を総会に出席させることができ、その代表者数の投票権を持つ。地域会員 (Regional Members) はヨーロッパ、アジア大洋州などの地域学会、FAOPS、FEPS などがこれに当たる。地域会員は総会にオブザーバーを送ることができるが投票権は無い。準会員 (Associate Members) は生理学の発達が十分でない国または地域の生理学者を代表する会員。会費が免除されている。準会員も総会にオブザーバーを送ることができるが投票権は無い。連携会員 (Affiliated Members) は国際学術団体であって、生理学と一部重なる科学分野を代表するもの。総会にオブザーバーを送ることができるが投票権は持たない。特別会員 (Special Members) は生理学の

振興に関心ある研究機関、企業等である。

IUPS の財政は国会員の分担金及び特別会員の会費によって賄われている。2006 年度の予算総額は US\$133,333、日本の分担金は US\$15,061 であった。

主な事業及び活動は、4 年毎の国際学術会議 Congress の開催と地域学会や Commission の活動の支援、学術総説誌 PHYSIOLOGY の発行（米国生理学会と共同編集で隔月発行）、会員への Website (<http://www.iups.org/>) による広報活動などである。最近の Congress は 1985 年バンクーバー、1989 年ヘルシンキ、1993 年グラスゴー、1997 年サントペテルブルグ、2001 年クライストチャーチ、2005 年はサンディエゴで開催した。日本における開催は東京オリンピックの翌年 1965 年に第 23 回が東京で開催された。第 2 次大戦後 20 年を経て日本も落ち着きを取り戻し、経済的にもやや余裕が出てきた頃である。しかし、国際会議の開催は珍しく、Huxley 先生や Katz 先生など著書や論文でお名前は知っていた海外の著名な生

理学者に直接お会いできた日本の生理学者も少なくなかった。

生理学を取り囲むさまざまな環境、とりわけ通信手段の電子化の進展とともに IUPS の活動を従来どおり続けるべきかどうかは課題となってきた。IUPS では一昨年長期計画委員会 Long Range Planning Committee (委員長 Denis Noble 教授) を設置し各国の加盟団体や個人を対象にしてアンケート調査が行われた。委員会ではその結果に基づいて勧告案を作成し、最近それが公開された。我が国からも岡田泰伸日本生理学会会長が委員として参加された。36 ページに亘るこの勧告案は IUPS の Website にも掲載 (<http://www.iups.org/Sections/Communications/FinalLRPCReport.pdf>) されているので詳細はそちらを見ていただきたいが、IUPS Congress のような全世界的な学術集会は最新の情報を開発途上国を含め広く発信する機会になるので、今後も継続することが勧告されている。